



## 我が神父は料理の天才

日々の暮らしの中から⑤

私が通う下松教会は県内のカトリック教会の中でも小さな教会。日曜日のミサ参加者は20、30人程度である。

主任司祭は原田豊己神父だが、神父は岡山のノートルダム清心女子大学の学長でもある。

「置かれた場所で咲きなさい」などのベストセラーの著書、シスター渡辺和子が長く学長を務められた大学としても有名だ。

神父・学長としてだけでなく、地区の幼稚園経営や広島平和記念聖堂保存、依存症の回復施設にかかわるなど実に多忙である。

ところが、多忙であるにもかかわらず、料理されるのが得意である。下松教会の日曜のミサのあと、時々、料理を作って我々信徒と一緒に食べる。

神父はプロテスタントの牧師と違い、生涯独身である。そのせいか原田神父に限らず、料理を作る神父は今までも見てきた。

イタリア人神父はよくスパゲッティを作られ、スペイン人神父はパエリアやトルティージャなどを作られた。

しかし、原田神父は日本料理、西洋料理を問わず何でも作られる。和食の時は漬物、洋食の時は

サラダに至るまで、実に手際がいい。これには主婦の信者も驚き、その作り方を習うほどである。

バザーや大勢の人が集まる時はステーキを焼かれる。先日、岩国、光、徳山などの信徒が下松教会に集まったが、その時もステーキを焼かれた。広島のコストコで20以上の肉を買って、50人前後でステーキを食べた。評判も上々である。「料理の天才」、

全くの畑違いの神父が誰かが驚くほどの料理を作られるのだから、それほ

どオーバーな表現とも思われない。

一方、本業の司祭職は、明治大学を卒業後、上智大学神学部に入學。その後、ローマ教皇庁ウルバノ大学で「聖書神学博士」を取得されたプロ中のプロ。

先日は岩徳プロックの講演会でも、旧約聖書のモーセ五書(創世記・出エジプト・レビ記・民数記・申命記)から「兄弟」に関する三つの話を引用

しながら、希薄になったと言われる。人間が神に出会った時、どう変わったかをわたりやわたり話す話さ

れた。聖書のなかでも、旧約聖書は

何のために教や料理を参考にその生き方を少しでもみない

たか理解するのは難しいと思うのは私だけではない。旧約聖書を読破しようと思いつく途中、挫折した人も多いと思う。それを聖書学のプロに解説してもらおうとわかり易く納得出来る。

さて、料理のプロでもある原田神父はよく信徒と共に食事を留意し、食べられるが、以前も「食事を共にすることの大切さ」について触れた。

肉をさばく原田神父



カトリックのミサが、キリストが弟子たちと「最後の晩餐(ばんさん)」を共にする中で、これを自分の記念として行えと言っていることを意味していると書いた。

そんな難しい話は別として、恋人同士が食事を一緒にすることで親しくなることは、昔からよく言われたことである。

交わりを深める一つの大切な手段であることは間違いない。

最近、人との交わりが

希薄になったと言われる。人間が神

何もご馳走を食べる必要はないが、簡単なお茶の時、どう変

もよみから、もつと意図的に飲食を共にすることで、

わたりやわたりを深めたいと思う。それが原田神父が料理を作り、信徒と食事をされる狙いだらう。

神のため、他者のため

に生涯を捧げる神父。説教や料理を参考にその生き方を少しでもみない

たいと思う。